

テキスト	ヨハネによる福音書 19章17～30節
参照教理問答	子どもカテキズム 問22～24, 26, 31 ウェストミンスター小教理問答 問25, 84～86

使徒ヨハネが描き出す十字架の出来事は、他の福音書とは違う情景を描き出す。ヨハネが特に注意して私たちに伝えるのは、この十字架の出来事がイエスの主導権のもとで最後まで貫徹されたことである。逮捕から裁判を経てくる間も常にそうであったが、最後の場面でもイエスは自ら進んで十字架を背負い、神と御子イエスの一つの意志が貫かれる。

ヨハネはゴルゴダでの出来事を四つの段落に分けて記し、イエスの十字架がどのような意味をもっていたかを伝えている。まず、イエスの十字架には罪状書きが添えられる。ピラトはそこに「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書いた。祭司長たちはこの書き方に不服であり、「ユダヤ人の王を僭称した」その罪状を書くようピラトに要求する。しかし、既にカイザルの軍門に下った彼らにはローマ総督に逆らう勢いはない。ピラトは「私が書いたものは、私が書いたものだ」と言い、「ユダヤ人の王」というタイトルを揺るがないものとして宣言する。ピラトはここでも本人の意図しないところで神の証人として働く。

罪状書きが三つの言語で記されていたことはヨハネだけが伝えている。ヘブライ語とは、旧約聖書が記された聖書ヘブライ語のことでなく、当時ユダヤ人たちの間で話されていたアラム語のことであろう。ラテン語はローマ人たちの言葉で、ギリシャ語は離散していたユダヤ人たちや異邦人たちの日用語である。このことの意義は、十字架につけられたイエスの「王」という称号が全世界に向けて発信されたことを表す。先に大祭司カイアファがイエスの死を自分ではそれと知らずに預言したとき、ヨハネは「国民のためばかりでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死ぬ、と言ったのである」（11章52節）と記したが、そのとおりに、どこから来たユダヤ人であろうと、異邦人であろうと、それを読むことがで

きた。

続いて、ヨハネは4人のローマ兵たちがイエスの衣服を分け合ったことを記す。このローマ兵たちはイエス自身にはまるで無関心である。貧しいイエスの衣装など大した分け前でもないだろうが、つまらない仕事の副収入とばかりにくじを引く。神の御業は、こうしてある人びとには完全に隠されている。しかしヨハネはこの兵士たちがイエスの下着を裂かなかったことに、詩編22編19節の御言葉を見出す。

詩編22編はイエスの十字架上で叫びを記した詩編としてよく知られている。新約の使徒たちにとって、この詩編はイエスの人の子としての苦しみと歌ったものである。ヨハネもまた、この詩編の成就を十字架の舞台に見る。兵士たちの心無い行為もまた、こうして神の救いの証言となる。

イエスの下着は縫い目のない一枚織りのものだったとある（23節）。それで破らなくくじを引くことになり、詩編の言葉が成就する。この縫い目のない一枚織りの下着は大祭司が身に着けるものであり、イエスが大祭司として十字架に上っておられることをヨハネは見逃さない。

三つ目の情景は、十字架を取り巻く別の四人と、イエスの愛する弟子との場面であり、そこで起こっている出来事を僅かに知りはじめた一塊の人びとがいる。それは主に女性たちであった。イエスの弟子たちや兄弟たちは誰一人としてイエスを救うことはできず、ある者はイエスを裏切る。けれどもイエスの死を見届けた証人の中に、確かに弟子たちやイエスの家族の姿がある。十字架の側にいたのは、イエスの母マリア、イエスの叔母（サロメと言われる一マルコ15章40節、16章1節参照）、クロパの妻マリアとマグダラのマリア。マリアの存在もまた詩編と関わる（22編10, 11節）。イエスが生まれたとき、母マリアは幼子を神殿に連れて行き、律法に従って主にささげた（ルカ2

章)。そのとき、シメオンが親子を祝福して、マリアに「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます」と告げている。そのとおりに、マリアは手足を釘で打ちぬかれた我が子を見て、胸を刺し貫かれる思いをする。

イエスはこのとき、母を愛する弟子に委ね、彼はイエスの母を自分の母とするようになる。つまり、愛する弟子はイエスの兄弟となる。この「愛する弟子」には弟子の理想像が投影されている。イエスは弟子たちを「わが友」と呼んだが（ヨハネ15章14,15節等）、十字架の下ではご自分の母を委ねて、弟子はイエスの兄弟となる。また、「婦人よ」というイエスの呼びかけには教会が対応する。詩編に歌われた母は、イエスの十字架の下に立つ教会の姿となる。カナの婚礼では、「婦人よ、あなたは私と何のかかわりがありますか」とイエスは母に言った。しかしイエスの十字架が立ち上がったこの時に、その「かかわり」が生じる。イエスの十字架上の言葉によって、母なる教会がイエスの弟子たちをわが子とするようになる。

最後に、「酸っぱい葡萄酒」が取り上げられる。これは兵士たちの飲む安酒を指す。「渴く」というイエスの言葉を耳にして、兵士たちはスポンジに葡萄酒を染み込ませ、ヒソブの枝につけて差し出す。ここにはヒソブではなくて、兵士たちが手にしていた槍のことだと記した写本もあり、情景としてはその方がもっともらしいが、「ヒソブ」であるのには意味がある。それは過越祭で用いる清めのための枝であり、門に子羊の血を塗るときに用いた刷毛代わりの植物であった（出エジプト12:22）。「わたしは門である」（ヨハネ10:9）とのイエスの言葉と併せて考えれば、過越祭に相応しい儀式が行われたことになる。また、イエスが「渴く」と言ったことも、兵士たちが「酸い葡萄酒」を献げたことも、詩編22編と合わせて、詩編69編22節の成就を表わす。

イエスはこの最後の場面をもって、「すべてのことが今や成し遂げられた」のを知る。そして、「父がお与えになった杯は飲むべきではないか」とペトロに言った通りに（18:11）、最後の杯を受けて

息を引き取る。「成し遂げられた」という最後の言葉は、イエスの十字架はすべて神の言葉が歴史に実現した出来事であることを告げる。人がそれに関心を注いでいたかどうかに関わらず、神ご自身が御子をお遣わしになり、旧約聖書に記されていた救いの約束が果たされた。イエスが「成し遂げられた」のは、十字架による罪の赦しのための犠牲である。この証言から私たちに知らされているのは、人間はここでは何の貢献もしていないということである。無関心であり、無力であり、冷淡であり、残酷であり、ただ一人、神の御子であるお方がそうした人びとの間ですべての苦しみを引き受けておられた。

イエスが王であると述べたり、イエスがすべてをご存知で最後まで意志を貫かれたと言うと、他の福音書が記すイエスの人間としての弱さは伝わってこないと感じられるかもしれない。けれども、イエスの十字架を見上げて知るべきことは、イエスの弱さや人間としての苦しみに我々が同情することではなく、その十字架の死の意味を確かに受け止めることである。

イエスの十字架の死には二つの側面がある。ヨハネはそれを明瞭に語る。我々はここに、人間の罪の悲惨さ、救いに対する絶望的な無力をみる。誰も自分自身を破滅から救うために立ち働くことはできない。これが十字架の悲惨さである。神がご自身の愛を託して御子を送られても、人間はこれを認めることができずに排除してしまう。人間が神を退け、愛に生きることを否定する印・傷が十字架である。

そしてもう一方には、神がそこで救いを完全に成し遂げられたことの表示がある。救いについての人間の完全な無力さは、神の全能がそこに表れることと対になっている。十字架は人間の絶望と神の希望とが背中合わせになっている印である。ヨハネはここに、神による救いの完成を、十字架の出来事を通して私たちに告げている。自分の救いのために人間は何もすることができない。そこから福音が福音として語られる。神がキリストにあって救いの言葉を成し遂げる。（牧野信成）

テキスト ヨハネによる福音書 19章17～30節  
子どもカテキズム 問22～24, 26, 31

---

**(単元のねらい)**

十字架上のイエス・キリストを見つめて、神を知らない人間の罪の深さを知り、その人間を罪から救う全能者なる神に心から信頼することを学ぶ。

---

**神さまの戦い**

---

今日はイエスさまの十字架のことを一緒に思い浮かべましょう。イエスさまが十字架につけられたのはゴルゴダの丘でした。エルサレムの町の外側であって、地面は岩でごつごつしていました。空気が乾いていますから、イエスさまも喉がとっても渴いたはずですよ。イエスさまと一緒に二人の強盗が十字架につけられました。イエスさまはその真ん中におられました。

イエスさまを裁判にかけたポンテオ・ピラトは、十字架の上に札をかがげました。そこには、「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書いてありました。みんながそれを見てわかるように、札は三種類の言葉で書かれていました。イエスさまのことを憎んでいたユダヤ人たちは「ユダヤ人の王」なんて書かないでくれとピラトに頼みましたが、ピラトは聞きませんでした。

十字架にかかったイエスさまの側には4人の兵士たちがいました。兵士たちはイエスさまの着ていた服をはぎ取って、勝手に自分のものにしてしまいました。兵士たちはイエスさまの着ていた下着も取ってしまったので、イエスさまは丸裸になりました。その下着は、神様に仕える祭司の着ているものと同じでしたが、兵士たちはくじを引いて、誰がそれをもらうかを決めました。

また、兵士たちの他にも、イエスさまの側には、イエスさまにお仕えした女の人たちがいました。その中にイエスさまを産んだお母さんのマリアもいました。イエスさまは十字架の側に、ご自分が大切にしていた弟子がいるのに気がついていました。それで、弟子に向かって、今日からマリアさ

んはあなたのお母さんになる、と言われました。イエスさまはお母さんを大切にされた方でした。

十字架の上で、喉が渴いたイエスさまは、「渴く」と言いました。近くにいた人は、スポンジをヒソプの枝につけて、それにすっぱい葡萄酒を浸して、イエスさまの口に近づけました。そうするとイエスさまは、その葡萄酒を一口飲んで、ついに息を引き取りました。裸にされて、見せ物にされて、沢山血を流して、喉も体もひからびて、イエスさまは十字架の上で亡くなりました。

どうして、こんな死に方をしなければならなかったのでしょうか？ イエスさまは何も悪いことをしていないばかりか、病気の人を治したりして、沢山の人の命を救ってくれたのに、人びとはイエスさまが悪者だと思って、死刑にしまいました。政治を行う人びとも、裁判を行う人びとも、誰もそんな間違ったことを止めさせようとしませんでした。

聖書はここで、私たちに大切なことを教えています。この世界には、こういう悪いことが起こります。神様の御旨を行う善い人が、勝手に悪い人にされてしまって、殺されてしまうようなことが起こります。この間「袴田巖さん」というおじいさんの裁判が始まりました。袴田さんは死刑囚でした。人殺しをしたと訴えられて、裁判にかけられて、死刑になることが決まっていた。刑務所に入ったとき、袴田さんは30歳でした。それから45年間もの長い間、刑務所で過ごすことになりました。すぐに死刑にならなかったのは、袴田さんは無罪だと言っていましたし、周りに信じ

る人びとがいたからです。そして、どうやら本当に無罪であって、警察の取り調べが間違っていたかもしれない、ということが分かってきて、もう一度裁判をやり直すことになりました。もし、無罪であることがはっきりすれば、勿論、死刑は取り消しになります。けれども、間違った裁判で失われた45年間という長い月日と、それまでに受けた恥ずかしさや苦しさは、誰にも取り戻すことはできません。

イエスさまは、袴田さんのように、無実なのに苦しめられた人の代表です。もしもイエスさまの時代に新聞やテレビがあったなら、「イエスの死刑が決定」という知らせを聞いて、誰もがイエスはひどいやつだ、なんて思い込んでしまったかもしれません。罪のないイエスさまを十字架につけたのは、そういう罪のある人間たちのせいです。私たちは罪ある世界に生きていて、誰もがそういう恐ろしい罪に無関係ではられません。

私は大学生のころ、聖書を読みながら、イエスさまの十字架のことをよく考えたことがありました。もし、自分がゴルゴダの丘にいて、イエスさまが十字架にかかる場所を見たとしたら、自分はどこにいたろう、と思いました。そして、ある晩、夢をみました。私はゴルゴダの丘にいました。十字架の立っているところからは離れていて、柵がめぐらしてありました。私はその柵の外側で、何人かの友だちと一緒に見物していました。周りには沢山の人が見物に来ていて、あれがイエスか、なんて人ごとのように話していました。私も学校の友だちと一緒にいて、楽しそうに笑っていました。そして、右手に石を持っていました。十字架に向かって投げたら命中するんじゃないか、と思っていたからです。その時、私は気がつきました。イエスさまが十字架にかかったとき、私はいったいどこにいたのか。十字架のそばにいて、イエスさまを守ろうとしていたのではありませんでした。イエスさまの弟子たちと一緒にいて、悲しんでいたのでもありませんでした。私はイエスさまのことを知らない仲間たちと一緒にいて、十字架を見物してただけでした。そして周りのみんな

と一緒にあって、笑いながら十字架のイエスさまに石を投げようとしていました。

イエスさまは、そういう私の罪のために十字架の上におられました。そういう私を赦して、愛するとその目が語っていました。わたしはその時、初めてイエスさまがわたしの救い主であることがわかりました。そして、イエスさまのことを伝える仕事がしたい、と思うようになりました。

私たち人間は恐ろしい罪の世界に生きています。そうして、人の罪に傷つきながら、神様の助けを待っています。このヨハネ福音書に書いてあるイエスさまの十字架の出来事は、すべて前もって旧約聖書に書かれていたことです。神様は、私たちを救うために約束しておられたことを決して裏切ることなく、イエスさまによって実現してくださいました。人間は自分の罪によってイエスさまを十字架につけてしまったのですけれども、それさえも神様の救いのご計画でした。私たちは罪から救われるために、自分では何もできないで、かえって神様に反抗するばかりなのですけれども、神様の御旨は聖書に書いてあるとおり、私たちのところで本当になりました。

神様は、イエスさまの十字架によって、私たちの罪を赦してくださいます。罪を赦していただき、私たちが父なる神様を見上げて生きるようになった時、無実の人が死ななくても済むような世界が現れます。まだそんな世界は完全に実現してはいませんが、神様は信じる私たちによってそういう善い方向へと導いてくれます。ピラトが十字架にかかげた「ユダヤ人の王」という札は、今、世界中の人びとに知られています。イエスさまは十字架にかかった本当の王です。神様の御旨にかなう王は、強い力で人の命を見殺しにするような王ではなく、人の命を救うために自分の命を神様にささげる王です。最後にイエスさまは「成就した」といって、息を引き取りました。神様の救いが実現した、という意味です。御自分の命を捨てて、私たちを罪のさばきからのがれさせてくださった、イエスさまを信じて、感謝したいと思います。(牧野信成)

---

【今週の暗唱聖句】 イザヤ書 53章12節

多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをしたのは、この人であった。

## 〈ねらい〉

クリスチャンにとって最も大切なイエス様の十字架の死の意味を理解して、遠い昔の出来事ではなく、今生きている自分のためのものだとすることを実感させる。学年末で、4月から新しい学年になり新しい環境になる子どもたちも多いので、私たちを罪から救ってくださったイエス様を信頼して歩めるように励ましましょう。

## 〈はじめに〉

皆さんは転んで擦りむいて血が出たことがありますか？ 少し擦りむいただけでも痛くて泣いてしまうかもしれませんね。イエス様は両手の真ん中に太いくぎのような尖ったもので木に打ちつけられました。それぞれ自分の手のひらを見て想像してみましょう。自分がそのようなことをされたらどうでしょう。今の日本でそんなことされるわけないと思いますか？ もしイエス様が十字架に掛かって私たちの身代わりになってくださらなかったら、私たち自身が十字架にかかればならなかったのです。それほど私たちの罪は大きいのです。

## 〈ワーク〉

1. イエス様は十字架につけられた時、「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書かれた罪状書きを掛けられました。誰がそれを書くよう命令しましたか？

(解答例)

[ローマ人の総督ポンテオ・ピラト]

ローマ人のピラトはユダヤ人を低く見てこのよ

うに書いたのですが、そこに書かれているとおり、イエス様はユダヤ人だけでなく世界中の人たちの王である方です。

2. 十字架のイエス様に対してローマの兵士たちはどのようなことをしましたか？

(解答例)

[イエス様の服を4つに分けて、下着はくじ引きをして誰のものにするか決めた]

3. イエス様は亡くなる前に何と言ったと聖書に書いてありますか？ 読んでみましょう。

※ヨハネによる福音書19章28節～30節をもう一度読んでみましょう。

4. イエス様が最後に「成し遂げられた」と言われたのはどう意味ですか？

(解答例)

[人間の罪を救うために神様が旧約聖書の時代から約束されたことをイエス様がすべて聖書に書かれているとおりに成し遂げられたということなど]

## 〈祈り〉

今日はイエス様が私たちの代わりに十字架の上で苦しんでくださったことを学びました。私たちが罪から救ってくださりありがとうございます。イエス様が私たちの救い主であることを信じて歩むことができますように。

対話の手掛かりとして……

①「成し遂げられた」(ヨハネ19:30)。主イエスが十字架の上で口にされたお言葉です。私たち人間もまた、何かを成し遂げるために生きていくところがあるかもしれません。目標も持ち、完成させることの中に、自分の人生の意義があるのだと。しかしいつも目標が見つかるわけでもありません。自分は何のために生きているのか分からない人もいます。またこのような人もいることでしょう。幸いなことに目標が見つかり、それを成し遂げるために走り出したものの、途中でつまづいてしまった人。リタイアしてしまった人もいると思うのです。そして、そういう人間には、失格の烙印が押されてしまうのです。そのような風潮というものが、私たちの生きている世界の中には存在しています。

②では、主イエスが十字架の上で成し遂げてくださったこととは何でしょうか。そもそも十字架につけられていること自体が、何かを成し遂げることとは無関係のように思えるかもしれません。ユダヤ人の“王”としての力強さも見られません。また「渴く」(ヨハネ19:28)と主イエスがおっしゃったように、身も心も渴き切って死んでいかれたのではないかと思う人もいるかもしれません。しかし、私たちはここに救いを、本当の勝利を見るのです。旧約聖書の数々の預言がキリストの十字架において成就しているように、神様はまさに私たちを罪から救い出すことを目指して、歩んで来られたのです。この神の救い、神の勝利は、信仰の目をもって見ないと見えてこないのです。私たちの肉の目、この地上における価値観からは見えてこないということです。

③だから、ここで神様が求めておられるのは、主の十字架の言葉にもう一度耳を傾けていくことです。主が十字架の上で覚えられた渴きとは、神様に対する渴きです。私たちも渴きを覚えることがあります。どこか自分の人生に満足できないのです。渴きはやがて死に結びつきます。その渴きを満たすために、必死に命の水を探し回ります。でもなかなか見つかりません。見つけることができたとあって、その谷に降りてみたものの、水がなかったということも起こり得るのです(詩編42編)。でもそのような私たちの魂を命の水で潤し、満たしてくださるお方がおられます。この方の招きに応えて、十字架のもとに来るときに、自分が本当に求めるべきものは何であったのかに気付かされていくのです。

④宗教改革者のルターという人は、「本当の罪人はイエス・キリストだけだ」と不思議なことを言いました。罪人として神様に裁かれ、捨てられていくということがどれほど恐ろしいことか。神様なしの人生がいかに空しいものであるか。そのことを私たち人間以上に深く味わってくださったのです。人間の罪というのは、神様を信じなくても何とかやっていけるのではないかと思うところにあるのではないのでしょうか。別に神様に見捨てられても自分は平気だと、どこかで思っているのです。しかしそうではないのだということを、主イエスは十字架の上で、私たちの代わりに味わってくださいました。そして、十字架の主は私たちに語りかけます。あなたはもうわたしのよう絶望して死んでいかなくてもよいのだと。だからもう私たちは絶望しなくてもいいのです。そこに十字架の言葉があるからです。十字架の言葉がない場所はもうどこにもないのです。